

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：32507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381095

研究課題名(和文) 幼児の創造的・総合的音楽活動プログラムの構築

研究課題名(英文) Construction of creative and comprehensive music activity for children

研究代表者

駒 久美子 (Koma, Kumiko)

和洋女子大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：10612608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、史的研究、研究者自身によるワークショップ、継続的なフィールドワークを通して、幼児の創造的・総合的音楽活動プログラムを構築するものである。その結果、日常的に音を探求する活動を取り入れること、音素材としての身の回りのモノに着目すること、即興的で応答的な音楽遊びを取り入れること、幼児が協同的に参加し合える音楽的環境を提供すること、以上4点が保育者自身が実践するための手だてとして浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to construct a creative and comprehensive music activities program for young children through historical investigations, workshops by the researchers themselves, and ongoing fieldwork. This study revealed four points that kindergarten's teachers can put into practice. These are: (1) incorporating activities to explore sound on a daily basis, (2) being aware of how objects in one's daily life can be utilized to create sounds, (3) incorporating spontaneous and responsive music play, and (4) providing a musical environment where young children can participate cooperatively.

研究分野：音楽教育学

キーワード：幼児音楽教育 即興 創造性 自発的な音表現

## 1. 研究開始当初の背景

子ども自身が音楽をつくる活動、すなわち創造的な音楽活動は、1960年代から1970年代にイギリス、アメリカ、カナダを中心に盛んとなり、Creative Music Making と称されるようになった。日本においては「創造的音楽学習」と訳され、1980年代から日本の音楽教育に大きな広がりを見せた。1989年の小学校学習指導要領には、「音楽をつくって表現できるようにする」活動として取り入れられ、2008年の改訂以降「音楽づくり」として示されてきた。一方で、幼稚園教育要領の領域「表現」においても、「自分なりに表現すること」と「創造性を豊かにする」ことが明示されており、幼児教育においても創造性を豊かにすることが目指されている。幼児の創造性への着目は、1960年代にもすでに幼児のことばと節づけの即興表現に関する実践が見られ、こうした活動が幼児の創造性を伸長させるものとして研究されている。しかしながら、幼稚園教育要領には、その具体的な方法は示されていないゆえに、現場の保育者たちが幼児の創造的な表現を支える術を持たないことが明らかとなっている(駒、2013)<sup>1</sup>。本研究者は、実際に幼稚園へ出かけ、研究者自らが実践者となって幼児とともに場を共有し、様々な音素材を用いて、一斉保育のなかで創造的な音楽活動を行う可能性を探り、その成果の一部を公表してきた。しかしながら、実際の保育現場においてクラスを担当する保育者は、通常1人ないし2人であり、しかも音楽の専門家ではない。つまり、保育の専門家ではあっても、音楽の専門家ではない保育者たちが、日々の保育のなかで幼児たちが生み出す豊かな表現を読み取り、支えるための手だてを探ることが喫緊の課題であろう。

そこで、本研究では、研究者自らが幼児と音楽活動を実践するだけでなく、日々の保育の中で幼児たちが何気なく生み出す「自発的な音表現・歌唱」へも焦点をあてることによって、より総合的で系統性を持った幼児の創造的音楽活動プログラムの構築を目指すものである。保育者がどのように幼児の生み出す自発的な表現を支えることができるのか、その手だてを歴史のおよび実践的研究から探っていきたい。

<sup>1</sup>駒久美子(2013)『幼児の集団的・創造的音楽活動に関する研究 応答性に着目した即興の展開』ふくろう出版。

## 2. 研究の目的

本研究は、史的研究、研究者自身によるワークショップ、継続的なフィールドワークを通して、幼児の創造的・総合的音楽活動プログラムを構築するものである。具体的には以下の3点について検討する。

- (1) 幼児の創造的な音楽活動はどのように考えられてきたか、歴史的側面から探ること
- (2) 研究者自身による音楽ワークショップを通して、一斉保育における創造的な音楽活動の可能性を探ること
- (3) 継続的なフィールドワークを通して自由保育における創造的な音楽活動の可能性を探ること

## 3. 研究の方法

- (1) 幼児教育雑誌、音楽教育雑誌における幼児の音・音楽に関する記事を整理し、幼児の創造的な音楽活動において「聴く」ことの重要性について検討する。
- (2) 音楽ワークショップを通して、誰もが扱うことのできる楽器が幼児の主体的で創造的な表現を引き出すことができるのか、また、こうした音楽活動を幼稚園で行うことの意味を検討する。
- (3) フィールドワークを通して、日常の保育場面から「自発的な音表現・歌唱」を抽出し、その様相を分析することによって、幼児の音楽的コミュニティの生成過程を検討する。

## 4. 研究成果

- (1) 史的にみる音に対する保育者の意識  
音・音楽は絶えず私たちの身の回りに存在し、私たちはそれを無意識的に聞いている。あるいはその音・音楽に注意を向けていないことが多い。一方で、幼稚園には、能動的であれ、受動的であれ、幼児が身の回りの音に耳を傾ける機会がある。例えば、自由あそびを観察していると、身の回りの音や人の声を真似したり、音を遊びに取り入れて楽しんだりしている場面に会う。あるいは、保育者の働きかけによって、身の回りの音へ興味を持ったり、一緒に聴こうとしたりする場面も少なくない。幼児たちが様々な音を聴き取り、それを意識化することによって、幼児たちの音の世界は無限に広がる。本研究者は、2014年に、雑誌『幼児の教育』に掲載された音・音楽に関連する記事分析を試み、音を聴くこと、音を探ることが新たな創造への一歩になっていることを論じた。これらはすべて戦後の実践であり、戦前の幼児教育については言及していなかった。戦前の幼児教育における音・音楽に関する研究は、唱歌や遊戯に関するものが多く、大沼(2011)が倉橋惣三の「耳観察」論に言及している以外、見当たらない。大沼は倉橋の「耳観察」論が、現在でいうところの「自分の身の周りの音を聴く活動」に相当する内容をもち、「環境との相互作用」と「子どもの表現の育ち」を結びつける萌芽的な言説として、今日的な視点からみて非常に興味深い活動であることが明らかになったと述べている。「環境との相互作用」という視点から幼児教育をとらえたとき、倉橋と同時代に生きたマリア・モンテッソーリを

げることができる。モンテッソーリは、音を聴く活動、すなわち聴覚訓練を感覚教育に位置付けている。モンテッソーリ教育における音楽教育の研究は、これまでもなされているが、聴覚訓練がどのように幼稚園に受容されたのかに焦点化した研究はなかった。そこで本研究では、モンテッソーリ教育における聴覚訓練に焦点をあて、モンテッソーリ教育を日本の保育界に紹介したひとりである倉橋惣三が、モンテッソーリ教育をどのように受容していったのか、あるいはモンテッソーリ教育は日本の幼稚園における感覚教育にどのような影響を及ぼしたのかを検討した。その結果、モンテッソーリの聴覚訓練では、教具が用いられていたが、それぞれの感覚を分離させて刺激を与えるため、それ以外の用い方をすることができないことが明らかとなった。そのため、子どもが自由に音を探求することができるような余地はほとんどない。つまり、制約が多いのである。また幼稚園での実際には、静粛練習には言及がなかった。それは、保育者自身が身の回りの音に耳を傾けることに対して意識が希薄だった、あるいは保育者自身が感覚教育を自然のなかでどのように扱ったらよいか、その具体的な手だてを持っていなかったことを指摘するに至った。

#### (2) 即興的で応答的な楽器遊びの有用性

日本の幼稚園には多かれ少なかれ、いくつかの簡易楽器がクラスに備え付けられている。その代表的な楽器としてタンブリンをあげることができる。日々の遊びのなかで、子どもが自由にタンブリンを鳴らして遊ぶ姿を目にすることもあろう。しかしながら、タンブリンは、音楽会などの合奏で用いられることが多く、楽器を用いた活動は、「遊び」ではなく、何か特別な活動として位置付けられていることが多い。それは、保育者自身が、楽器を特別な技術や技能が必要なものとして捉えているからではないだろうか。その結果、子どもたちの楽器を用いた活動においても技術指導が中心となっていることは否めない。そこで、本研究者は、幼児の主体的で創造的な表現を引き出す試みとして、一斉保育のなかでワークショップによるタンブリンを用いた即興的で応答的な楽器遊びを行った。タンブリンを用いて幼児はどのように主体的な表現をつくりだすか、またタンブリンは、幼児の創造的な表現を引き出す楽器となり得るのか、その可能性を探った。その結果、タンブリンを使用することで、exploring - proposing - devising - sharing (探索 - 提案 - 工夫 - 共有) という4つのプロセスを経て、幼児たちの創造的な表現が促進され、タンブリンが幼児の主体的表現を引き出すための楽器として有用であることが明らかとなった。

#### (3) 社会文化的環境と音楽的創造性の関連

身の回りには、魅力的な音を出すことができるモノが多数ある。幼児たちは日常的にこうした身の回りのモノや、他者と関わりながら、生活している。こうした社会文化的環境との関わりを通して、幼児の音楽的な創造性はどのように育まれるのか、抽出対象男児（以下、対象男児）を中心として、自由遊びにおける自発的な音楽表現を分析した。その結果、以下の4点が明らかとなった。

##### 周辺的な参加

女兒たちはカラフルなビニールで作ったスカートをはき、歌ったり踊ったりして、ステージごっこを楽しんでいた。この遊びの過程において対象男児はまだ「新参者」であり、この遊びのコミュニティには参加していない。よく知っている音楽になると、次第にこの遊びのコミュニティに周辺的に参加するようになる。しかも対象男児は、ただ女兒たちを見て真似て参加するのではなく、フルートを想起するような製作物を手に持ち、ステージの前を行ったり来たりすることによって、持続的に参加していく。つまり、女兒たちの作っている「歌って踊る」というコミュニティを共有するだけでなく、「楽器を持って踊る」という新たな文化を付加してコミュニティに参加していったのであった。

##### 身体的共鳴

さらに、対象男児はステージ前を行ったり来たりしながら軽やかなステップを踏んでいく。対象男児は周辺的に参加しつつ、ステップを通して身体的に共鳴していることがわかる。そして、その場を共有するすべての者が、音楽する人となって身体的に共鳴していった。とりわけ、対象男児においては、実際に鳴り響く音と、彼がイメージした楽器の音が、彼自身の身体のなかで響きあい、音楽のリズムに身体が共振していたのだった。

##### 新しい素材の工夫

さらに、対象男児は新たにオリジナル楽器となる箱太鼓を作ることによって、またステージごっこへ没入していった。その楽しさがほかの男児たちにも伝播し、新たな巻き込みを生んでいく。ほかの男児らは、対象男児の「楽器を持って演奏する」というイメージを共有し、新たな工夫を始める。それが「楽譜を書くこと」であった。「楽譜をつくる」という工夫によって、対象男児の始めたステージごっこに新たな展開をもたらしていたのであった。

##### 新しい音の探索

ほかの男児らが楽譜づくりという新たな工夫を生み出したとき、対象男児もまた、新たな音素材を発見する。この音素材には、廊下に作られたステージから、室内に移動したことによって期せずして出会った、バケツである。最初はバケツの中にカプラを入れて「振る」ことを試していた。しかし振ることによって生まれた音は、どうやら彼のイメージする音にならなかったらしい。次にバケツのフチを勢いよく叩くと、安定が悪い。そこ

で、たどり着いたのがバケツの底を叩くという音だった。近くにいた女兒は、対象男児のそばに座り、この音に耳をかたむけ、彼に向かって「いい音だね」と声をかける。この声かけによって触発された対象男児は、バケツの底と自分の手作り箱太鼓を交互に叩くことを、いっそう楽しんでいた。

こうして遊びに没入していく過程で、対象男児は「吹く」「叩く」「振る」という楽器をイメージし、それを制作し、試してみる、ということを繰り返している。一般的には楽器とは呼べないプリミティブなものであるかもしれない。しかし、女兒たちのステージごっこという文化に、最初は周辺的に参加しつつも、新たなアイデアを提案し、この自由遊びに楽器を取り入れるという新たな文化を付加していた。この新たな文化は、翌週の女兒たちの遊びにも引き継がれていったのである。

この自由遊びにおける保育者の役割とは、どのようなものであったのだろうか。保育者は幼児同士の思いに寄り添い、「ステージ」を中心とした、幼児が協同的に参加し合える環境を提供していた。そして、幼児の工夫に共感し、時には観客となって幼児の表現を認め、幼児が遊びに集中、没入できるよう支えていたのであった。つまり、保育者によって周到に仕組まれた環境に、幼児同士が新たな文化を付加していくことによって、幼児たちは遊びへ没入していったのであった。

最初に見られた女兒たちのステージごっこは、女兒に限られた文化であり、一緒に遊んでいるようで、一人ひとりが自由な表現を楽しむ段階であった。そこに対象男児が手作り楽器遊びという新たな文化を付加することによって、一人ひとりが自由な表現を楽しむだけでなく、他の幼児たちを巻き込んだ新たな文化を創出している。この過程において、幼児たちは、他者の表現を自己の中に取り込んだり、新たな素材を探求したり、表現したり、共同したりしている。こうした営みが幼児の音楽的創造性を育てるのである。つまり、幼稚園において、幼児たちによる文化の生成と音楽的創造性は相互に関連しつつ、発達することが明らかとなった。

#### (4) 音楽的コミュニケーションとコミュニティ

幼稚園教育の基本は、環境を通して行うものであり、保育者は幼児ひとりひとりの主体的な遊びを促す環境を構成する必要がある。多様な遊びを経験することができる環境のひとつとして、楽器コーナーがある。本研究者は2013年9月より、東京都にある公立幼稚園において、週に1度、こどもの自由遊びの観察を行ってきた。この幼稚園では、タンブリン、鈴、トライアングル、カスタネットは各クラスで日常的に使用することができ

る。10月終わりごろから12月まで、5歳児クラスの廊下には、大太鼓や小太鼓、シンバル、ウッドブロック、木琴などの楽器コーナーも設置される。廊下の一部に楽器コーナーが設置されていることによって、ひとりで楽器コーナーに立ち寄り、木琴を1音2音鳴らすだけの幼児や、数人で思い思いに楽器を鳴らす幼児たち、カスタネットを手に持ち踊りながら打つ幼児など楽器遊びを楽しむ幼児の姿を見ることができ、そこには楽器遊びというコミュニティが生まれていく。そこでこうした自由な楽器遊びを通して、どのように音楽的コミュニティを創り合うのか3つの事例を検討した。

その結果、事例1では、子どもたちは楽器遊びという「現象」を、他者とハンドベルという「モノ」を介して相互作用しており、それを「人」である保育者が支えているという様相が明らかとなったが、一方でこの楽器遊びはこれ以上の広がりを見ることができなかった。それは、幼児たちは、音階を順番に鳴らしたり、Do-Re-Miを演奏したりすることを目的として、既製のものを再現することを試みていたからである。また、ハンドベルという楽器が、メロディを奏でることができる楽器であり、さらにDo-Re-Miは幼児たちにとっても良く知っている既製曲であったため、間違えがよくわかることに起因しているのではないだろうか。つまり、鳴らす順番を間違えてしまうと、幼児たち自身お互いに間違えたことに気づき、それを指摘したり、思うような速さで演奏することができなかつたりすることが、活動の広がりを妨げていたと推察できる。

事例2で選択された楽器は、スネアドラム、バスドラム、グロッケンシュピールである。グロッケン鍵盤打楽器であり、メロディを演奏することができる楽器である。しかしながら、ある女兒がグロッケンをメロディ楽器として扱わず、音の高低を鳴らすことができるリズム打楽器として扱ったことによって、たった1音ずつの応酬ではあるが、「順番に」というルールから、新たに「会話」というルールを生み出す契機となっており、事例1のように既製の楽曲を演奏することにとらわれることなく、楽器遊びが発展したといえる。

事例3では、事例2で見られた女兒を含めた新たな仲間が集まり、アンサンブルグループが結成されている。できあがった音楽を見てみると、そこには幼児たちの思いや意図をみることができる。事例2で用いられた「順番に」というルールがいかされ、さらに楽器の特性をいかした「会話」へと発展させることができたのは、言語による会話がなくても幼児たちが互いの音の響きをよく聞き、他者の音・リズムを認め(承認)、自分の音・リズムを提案したり、修正したりしながら、自分もまた他者に認められる存在として、アンサンブルをつくっていたからにほかならない。

以上のことから、以下の3点が明らかとなった。

他者の意見を受け入れるとともに、自分の考えや気持ちを伝えることの重要性、他者の音を聴くとともに、自分の音も良く聴くことの重要性、すなわち、それが幼児自身の自己効力感を高める機会となっていること、既製の楽曲を演奏することにこだわらず、幼児たち自身が即興を通して音楽を生み出すことができる環境の重要性である。そして、これらの活動を見守り支える保育者のつくりだす環境設定がなにより重要であることが明らかとなった。

#### (5) まとめ

以上(1)から(4)において明らかになったことをふまえ、保育者自身が実践するための幼児の創造的・総合的音楽活動の手だてとして、以下の4点を挙げたい。

日常的に音を探求する活動を取り入れること、音素材としての身の回りのモノに着目すること、即興的で応答的な音楽遊びを取り入れること、幼児が協同的に参加し合える音楽的環境を提供すること、である。それはまた、保育者養成にあっても同様に、これらを手だてとして、既製の楽曲を演奏することにこだわらず、幼児とともに、即興を通して音楽を生み出すことができる未来の保育者を育成することにつながるといえる。

### 5. 主な発表論文等

#### [雑誌論文](計3件)

Kumiko KOMA(2017) Musical Communication and the Generation of a Musical Community: During Free Play in a Japanese Kindergarten, International Journal of Creativity in Music Education, Vol.5, pp.95-113. 査読有

Kumiko KOMA(2016) Auditory training using Montessori method as a sensory education: Compliance in kindergartens, Journal of Creative Music Activity for Children, Vol.4, pp.69-89. 査読有

Kumiko KOMA(2015) Playing with Musical Instrument Pulls out Spontaneous Expressions of Children: Through Analyzing of Improvised Conversation Using the Tambourine, The 10th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research/ ISME Asia-Pacific Regional Conference 2015, Proceeding (USB) 査読有

#### [学会発表](計6件)

駒久美子(2016)「ルールの先にある Creativity」(シンポジウム:「音楽のルールと伝統を破る」企画:坪能由紀子)ICMAC (Institute of Creative Music Activity for Children) 2016, 平成28年8月7日

於:豊明小学校

Kumiko KOMA(2016) Musical Communication and the Development of a Musical Community during Free Play in a Japanese Kindergarten, 32nd ISME World Conference 2016 (International Society for Music Education) 平成28年7月25日 於:Royal Concert Hall (グラスゴー, スコットランド)

Kumiko KOMA(2016) Exploring Spontaneous Play using Musical Instruments in Kindergarten: An Analysis Based on the Expression Theory of Sozo Kurahashi, International Society for Music Education: Early Childhood Music Education commission ECME 17th International Seminar 平成28年7月18日 於:Akoesticum (エーデ, オランダ)

Kumiko KOMA(2015) The World of Music Created by Children, the World of Music Created together with Children, (Symposium: Relationship between Children's Music and Development during Infancy, Coordinator: Hiroshi OKAMURA), International Association of Early Childhood Education 36th Annual Convention 平成27年9月12日 於:Daegu University (大邱, 韓国)

Kumiko KOMA(2015) Playing with Musical Instrument Pulls out Spontaneous Expressions of Children: Through Analyzing of Improvised Conversation Using the Tambourine, 平成27年7月12日 於:The Hong Kong Institute of Education (香港)

Kumiko KOMA(2014) Exploring spontaneous music-making in free play, Creativity Conference 2014, 平成26年6月28日 於:日本女子大学

#### [図書](計1件)

坪能由紀子・味府美香・片岡寛晶・木下和彦・駒久美子・早川富美子 共著、全音楽譜出版社、みんなピアノだい好き!、2016年、164頁

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

駒久美子(KOMA, Kumiko)

和洋女子大学・人文社会科学系・准教授  
研究者番号:10612608